歯科技工技術の医科への応用
―職域拡大の可能性について－

北海道大学病院　生体技工部　歯科技工士　西川圭吾

超高齢化社会を迎えた今日、日常臨床におけるチーム医療の役割が患者のQOL（Quality of Life）の向上に大きく関与することが明らかとなり、口腔ケアや摂食嚥下に代表されるように、歯科と医科との垣根を越えた連携が重要視されてきています。北海道大学病院においては、2003年に医科と歯科の統合がはかられた時、歯科技工室も「生体技工部」と改称されました。以後、現在に至るまで、当院各診療科から顎顔面補綴症例及び全身的な修復症例に対応した補綴装置・装具（エピテーゼ・プロテーゼ）の依頼を受け、当初より、デジタル技術も応用し、多数製作してきました。これらの経験を通して、我々歯科技工士の知識と技術が、顎顔面補綴症例及び全身的な修復症例における患者のQOLの向上に寄与していることを肌身で実感してきました。今回は、医科より依頼を受けた補綴装置の種類・用途および製作方法について時系列で解説しながら、医科における歯科技工技術の有用性と職域拡大の可能性について考察したいと思います。